

我が恩師の思い出—1

川崎医大 学長 植木 宏明

“接する人すべて師である”という金言はさておき、通常は一人の生涯にそうたくさん恩師に恵まれるものでもない。私の場合、岡山大学に入局以来、谷奥喜平先生(同大名譽教授)、野原望教授(同大名譽教授、川崎医大初代教授)、川村明義教授(東大名譽教授、医科研細菌学)、そして、ミュンヘン大学皮膚科のOtto Braun-Falco教授であり、川崎医大へ赴任してからは、皮膚科ではないが当時の水野祥太郎学長である。恩師とは、ただ単にそこに師が存在するというだけのものではなく、弟子があつての師であり、弟子からみての師であるわけで、時には弟子のひとりよがりのこともある。私にとって5人の先達を師と仰げる幸せに浴しているともいえる。不肖の弟子にしてみれば、恩師とはいささか憚られるわけでもあるが、これも師の考えではなく、弟子からみての勝手な印象であり、片思いであるから致しかたないことになる。

さて、谷奥喜平先生(Fig. 1)は、私が昭和37年春に入局した時の岡山大学皮膚科学教授であり、ちょうど東大から信州大学を経て転任して来られたばかりであつたが、学会などでの活躍は精力的で、まさに飛ぶ鳥を落とすような勢

いと迫力があつた。当時の教室の研究課題は皮膚アレルギー一般、薬剤アレルギー、日光アレルギー、感染症、化学療法、ビタミン代謝、蛋白質代謝、糖質代謝、蕁麻疹、接触アレルギー、自己アレルギーなどであつた。各々のテーマには指導者と若い医師が張り付いて、教室は土曜日も日曜日もなく、毎夜12時頃まで火の燃えている工場のごとき活気を帯びていた。学会も皮膚科の学会ばかりでなく、アレルギー学会、結合織学会、化学療法学会、生化学会などにも多数出題していた。毎朝のように出勤してくると、私の机の上には先生のメモと同時に、英語やドイツ語、フランス語の分厚い書物や論文が置いてあつたのも、この頃であらう。仕事の合間に読むようにということであるが、全部を読みこなすことはなかなか大変であつた。

さて、谷奥先生は舞鶴市のご出身で、旧制の第8高等学校(名古屋)、次いで東京帝国大学で学ばれ、皮膚科入局は、当時太田正男教授の主宰されていた教室で、安田利顕先生(日本皮膚科学会理事長、関東通信病院部長)と同期とのことだつた。太田先生は太田母斑の名前で世界的に知られているが、癩病[ハンセン病]の研究にも情熱を注がれ、また、同時に木下空太郎のペンネームで詩人、文学者としても有名であつた。皮膚科医としての太田先生についてはよく谷奥先生から伺つたものだつた。その頃、岡山大学皮膚科教室には、野原助教授[後年、川崎医大及び岡山大学教授]、吉田彦太郎講師[後年、長崎大学教授]、竹中守講師、大森純郎講師、同輩に荒田次郎[後年、高知医大教授、岡山大学教授、病院長]、高岩堯[後年、香川医大教授、病院長]、小玉肇(後年、高知医大



Fig. 1. 谷奥喜平先生

教授)などがおられ、夫々に個性的で、多方面で活躍され、大勢の部下を指導されていた。

谷奥先生は教室内ではいつも論文を読み、原稿を書き、疲れると研究室内をぶらついては仕事している者と雑談されたり、誰かを誘ってコーヒーを飲み外へ出かけたりされた。先生は病気について絶えず新しいことを考え、それを解明されようとしておられた。教室にたくさんテーマがあったのも、その表れであろう。常に最先端を歩まれていたから皮膚科の中に留ることよりも、他の領域、特に基礎医学系の方々との交遊が広く、何か分からない事があると、直ちに電話されたり、紹介したりして下さった。それが診察中であろうと、会議中であろうと、正月であろうと、お構いなしであった。逆に私が川崎医大に赴任してくると、先生から日に何度も電話攻勢を受けることもなった。また、毎夏、健康の為のドック入院は川崎医大附属病院の15階病室で、木原教授の診察やゾンデによる内視鏡検査を受けながら、やはり研究の思索や原稿書きに熱中されていた。私はそこでも度々用事を仰せつかったが、先生は定期検査を受けられながら15階の病室での避暑生活でもあった。岡山大学からは秘書がやはり定期便を持って往復されていた。

先生の外国語はむしろ下手であったが(日本語も決して上手とはいえなかった)、読む方は達者で英語もドイツ語も、フランス語も必要な文献はすべてご自分で読破されていた。先生は一般的な意味ではスマートでも洗練されているともいえず、むしろ野暮ったい方であったし、権威とか、形式とか、格好付けとか、飾ることは全くされず、むしろ意識的に排除されていたようである。先生のお話にも、講演にも、講義にも起承転結は一切無視され、通常のお言葉には主語も固有名詞も欠落し、代りに代名詞がやたらに増えるありさまであった。時には学会などでも壇上で代名詞でやられたり、質問があると、怒ったように真っ赤な顔になって反論されたりで、他の大学の人々には怖い存在であったようで、大橋勝教授(当時の名古屋大)によれば、

当時の先生のあだ名が“白熊”であった。先生は教室員の意見はよく聞かれた。個性的ではあったが、他人や反対者の意見は尊重された。当時の教室の特徴は熱気と共に多彩な人材が輝いていたことであろう。個性的で、考えの違った人々が夫々の立場で伸び伸びと仕事をし、遊ぶことも出来た事は特記されよう。先生の包容力、許容力は大きく、同時に部下の一人一人が自分の責任と義務を自覚するようにもなった。先生はまた、仕事上の必要があれば、直ちに、いろんな人々を紹介して下さった。専門の皮膚科領域を除いて、伝染病研究所の進藤宙二所長[東大教授]、同じく細菌学(リケッチャ専門)の川村明義東大教授、阪大内科の山村雄一教授(後年の総長)、京大の浜島義博教授[免疫病理学]、東京医大の大高裕一学長[病理学教授]、千葉大学病理学[免疫病理学]の岡林篤教授等である。先生の研究を通しての友人の広がり大きさには驚嘆させられた。今、思い起しても、谷奥先生は学問一筋であり、部下には症例から病態を考えること、難治性の患者は長期間 follow up することを要求された。私が SLE や膠原病を専攻することになった理由は入局して最初の受け持ち患者がたまたま SLE であったことであるが、恩師の教えに従い20年、30年以上 follow させて頂いた患者は結局60名を越えていた。一人一人の患者から実に多くのことを学ばせていただいた。

恩師谷奥先生から多くのことを指導されながら、生意気盛りであった私は、先生に全く相談することもなく、勝手にドイツ(ミュンヘン大学)留学を決めてしまった。それを先生は寛容にも許可して下さいましたが、後で教室の先輩からそういうことはまず主任教授の許可をいただいてから始めるものだと言われた。今も反省しているが、川崎医大に赴任してからは部下が勝手に海外留学を決めてきても積極的に支援することができた。お蔭で私の教授在任中に16名、延べ21名の海外留学者がでた。行き先はアメリカ、ドイツであったが、このことを通じてまた、多くの友人を世界に持つことが出来た。

今、回顧してみても、先生は常に真実を追究され、不確かなものには確かさを求め、疾患の原因、病態、治療方法の追求に傾倒され、誠に正月も夏休みもなかった。正月元旦にも正午には教授室の電気がつき、原稿を書き、時々当直医を励まし、慰められていた。その姿に私は頼もしさ、壮絶さを感じ、同時に希望と勇気も与えていただいた。そして、学問やご自身に対して厳しい反面、部下には寛大であったことも忘れられない。そして谷奥教授の門下生から、6名の教授が輩出した。

さて、谷奥先生は大学を御定年直前には、暇をみては部屋でクラシック音楽を鑑賞されていた。部下からみて何か予想外のご趣味で、この点は私にも長い間、理解し難いことであったが、最近何か分かるような感じがしてきた。とにかく、谷奥先生は人間的にも学問的にも誠にスケールの大きな方であり、人間的魅力にも満ち溢れていた。医師になっての出発点から、このように大きな師に恵まれたことは、私の最大の幸運であり、深い感謝である。